



SPACE No.35

日本臨床心理身体運動学会会報第 35 号 2019 年 6 月 25 日

編集発行 日本臨床心理身体運動学会 会長 山中康裕

臨床心理身体運動学会第 20 回記念大会を開催して

実行委員長/理事長 中島登代子

1.

遅くなりました。20 回大会の総括？を行いたいと思います。実行委員の皆さん、本当にすみません。特に長岡先生には、10 数回も催促のメールをいただきながら、動けませんでした。お許してください。でも、やはり今なのですね。

本学会は設立から 20 年が経過しました。会員それぞれの、さまざまな思い（偏見や勘違いや純情も含めて…）が交錯し、ある時は時代に流され、ある時は時代に逆らい、何とか 20 年を乗り越えてきた——というのが、実際のところでしょうか。当学会の設立そのものが、当時の世相を反映し、心理臨床の熱気が強く影響していました…。あれから 20 年。

今回の学会大会は、さまざまな趣向が凝らされていました。たとえば学会プログラム然り。20 年の学会の歩みが掲載されています。それから…。

今回の大会は、大会委員長として 3 回目（手元での開催は 4 回目）ですが、一番やりたいたいことができなかつたある意味で不満足な大会だった、ということ、実行委員の皆さんに袋叩きに会うでしょうね。しかしこれは、歴代の大会委員長が味わっていることを、ほかならぬ私自身が味わった、という事と考えました。一方で、後世にモデルとして残しておきたい大会だったといえます。矛盾はしていません。大会委員長が満足するようでは、いい大会にはならない、そういう事だからです。でも、ところどころ思いっきり好きなようにやらしてもらったのは疑いありませんでした。実行委員の方々のおかげです。そのあたりを少し書いてみます。あ、文句、というのではありません。実は嬉しいことです。なぜそうなったかについて、が重要と思っています。

これまでの 3 回（#1、#6、#11【古谷委員長】）の実行委員は、多くの「(学会大会についての運営を)知らない人」と、ごく少数の「少し知っている人」の集まりでしたから、私の存在や意向が大きかったように思います。私の顔色や機嫌を伺いながら？「実行してくれた」のでした。しかし今回は違いました。多くの実行委員のうち 10 名を超える委員が、学会大会開催はどうすればいいかを「体験的に知っている」ために、それぞれがそれぞれの思いを実現できるようになったのです。大人になった、のでした。そういう人々が 20 回弱の実行委員会を開催し、議論し、方向性を決め、動きました。これこそ運営のモデルと考える所以です。

これは私としたら、もちろん嬉しいことですけれど、それなりにたいへんでした。「嬉しい」の意味は、それぞれが委員として存在感や実感をもってやり遂げる、という目標を、私が私自身に課したからです。だからこそ、分担をはっきり示し、それぞれのパートを任せました。もちろん本意を口に出して言いませんでしたが。「たいへん」というのは、これによって起こるべくして起こることでした。私自身のところの中での葛藤です、戦いです。最終決定は実行委員長、と言ってくれるのはありがたいのですが、実際になるとなかなか…。面白いでしょう？ これは実に楽しかったです。

2.

さて、裏方はさておき、せっかく浜松へ来てくださった参加者の方々には、できる限りの「おもてなし」をしたいと思いました。地元として自信があるのは、みかん、お茶、綿紬…。ウナギまでは手が回りませんでした。

記念品の風呂敷は、遠州浜松の綿紬、富士山イメージの色模様でしたね。お気づきでしたでしょうか。記念品を作っていたいただいた「ぬくもり工房」という綿紬を扱う会社に、ちょっと無理なお願いして休憩室に出店してもらって、皆様に良質の綿紬をお土産に買ってもらえるよう手配しました。

また、みかんは「三ケ日みかん」という最高のブランドもの。浜松市内でも、当年度は品薄で、当日になるまでどれだけ準備できるかわからなかったのです…。もちろん味は普通の青島などとはくらべものにならない良い味と自負します。三ケ日のミカン農家の方に無理を言って（普通のみかんの数倍の金額なので何度か意思確認され（笑））、学会の為に特別に3箱準備してもらって、参加者の方に自由に食してもらいました。召し上がってくださいましたか？ 普通に手に入るみかんじゃなかったのですが、お気づきでしたでしょうか。

そして、お茶。地元の茶園、光緑園さん、お茶を、自家の畑で育て仕上げまで行う（またそれが美味しいのです！）名実ともに「地元の茶園」にお願いし、かなりの良質の煎茶を学会員のために連日準備。また同時に、買い求めていただけるように、若社長さんに学会期間中出店をしてもらっていたのです。お味はお気に召したでしょうか

すべてが、相当な準備期間を経て、相当のお金もかけて、選び抜いた地元特産の名品でした。そう、これらは、もっと、宣伝すべきでしたね…。

いやいや、私が悪いのです。不手際はすべて私の責任です。本当にごめんなさい。実行委員の皆さんは、とてもとてもとても頑張って、それぞれの力を発揮してくださいました。やはり心理臨床家の集団でしたね。かゆいところに手が届く、そんな動きをしてくれたのです。凄い！

3.

ちなみに、運営も中身も、クオリティは相当なものでした。自画自賛（笑）！！

たとえば、写真を担当したのは後藤慎吾さん。その道のプロフェッショナルである音楽座ミュージカルの相川オーナーが、前日のアルバムを一目見て、「この写真は！」と絶句。スタッフが撮っていると聞いて「いやあ、うまいですね！」と感嘆したほど。相川さんはそんなに簡単に知らない人を褒めることはありません。また、これまでのお付き合いもありましたから、とても正直で外交辞令の必要のないところで、この一言をいただけたこと

は素晴らしかったし、私もとても嬉しかったのです。他、残念ながら省略しますが、それぞれのもてなし対応のクオリティが半端ないものでした。見ていてハラハラ・イライラしなかったのです、この私が、ですよ。

駐車場系の端々まで情報が行き届き、皆が連動して滞りなく動けたのは、佐渡忠洋さんの提案での、グループラインが大きかったですね。彼は古谷さんのサポーターとしての統括の動きも見事でした。これによって、私もグループラインの威力を知りました。全員がハンディトーカーを共有しているようなものでした。これは使えます！

全ての実行委員（学会員で学内関係者）は 20 名を超えるわけですが、担当者一人一人の好みやニーズ、性格などを把握して、それぞれ適材適所で配することと、当日の動きは、古谷さんが数か月かけて練り上げたものでした。当日スケジュールも詳細な時間割が組まれていました。実にはたいへんだったでしょう。しかし成し遂げました。彼自身に充実感が相当あったのではないかと察します。彼の周りで陰のように寄り添い、目立たぬようにサポートしていた数名には感謝の言葉もありません。古谷さん、気が付いていましたか？

印象的な思い出を一つ上げるとすると、プログラムをたくさん（2倍ほど）印刷したいという私と、それに古谷さんが真っ向から反対、他のことにお金がかかるからと、正面からぶつかったことです。お金の使い道にまで発展し、どちらも譲らず議論しました。中島の言う通りにはやらないゾ（やったらたいへん！）、という気迫が彼にはありましたので、私の思いはあえなく撃沈。それでも沈没前に懇願し「想い」を半分は「実現」してもらいました。この増刷分は、おそらく学会が続く限り保存され、新入会の方々に配布されてゆくことでしょう。ただし、増刷を認めてもらう条件だった「保管は自身で」は、きちんと守って個人の倉庫に入れてあります（笑）。欲しい人は言ってください。また、お金の管理では、木村佐枝子さん、ほんとうにありがとうございました。

さて、議論の元になったプログラムを見てください！ 担当者である長岡由紀子さんの気持ちのこもった、さすが、のプログラムに仕上がっています。とても時間をかけて、皆がプログラム作りに参加できる配慮もして、彼女の力が存分に発揮されたプログラムだったのではないかと思います。永久保存版です！ 私としては、これを多く残したいと考えたのですよ…それって悪くないと思うのですが。今後の 20 年を考えると、お茶菓子になるよりいいと思ったのです。

4.

大会の内容です。

ワークショップの参加者は、相当な人数の方々に来ていただきました。企画者としてはうれしく思います。研究発表でも発表者、座長、指定討論の先生方、本当にエネルギーのこもった討論の場を作ってくださいましたこと、心より感謝申し上げます。河合隼雄先生が、心理臨床系の学会では、発表の場は同時に研修の場である、というような趣旨のことをおっしゃっていましたが、当学会はそれをしっかりと守っていていると感じられたことでした。

こうしたことを、やはり 20 年の集大成として、今後へのモデルとして、指標として、残せたことをうれしく思います。今大会が、次の 20 年に、しっかりと受け継がれていくことを切に希望するものです。

この総括を書いているのは、すでに 21 回大会が開催された後ですが、21 回はちょっと違った大会になった（モデルとは全く違ってしまった）のですが、一方で新しい一歩になりました（第 1 回の研究フォーラムとして）。これは、また喜ばしいことだと思います。

22 回大会は、どうなるのでしょうか。前年のフォーラム開催でとてもよく分かったのは、毎回のように参加している会員と、ほとんど参加していない会員とは、かなりなギャップがあることでした。これは、視点を変えると、わが学会の存在理由が認識できた瞬間でした。発表内容も含めて、一つ一つのイベントに、どのような感想が語られるか、とても興味深く、いつも聞いていますが、それで強く感じられたことでした。ともあれそういう意味では、恐ろしいことにこの 20 回大会は、私自身の力不足も露呈した学会大会でした。シンポジウムのことです。

「イメージのちから」を標題にしながら、山中康裕先生がパネルの私の隣で、音（楽）イメージへ展開されようとしたところに、私がついて行けなかったことを、終了後しばらくして気が付いて、深く深く後悔しました。私の狭量で、広がろうとした「イメージのちから」を削いでしまいました。ああ…とても残念なことでした。

シンポジウム当日のプレゼンテーションは、木村佐枝子さんのおかげで、すでにすべて文字になっていますが、その後私が動いていません。当日、文字に起こすことを前提にしていたことで、音に対してあまりに無頓着だったのです。山中先生、申し訳ありませんでした。このこと当日フロアにいた会員には、お気づきだったでしょうか。許されれば学会誌の次号に、内容を再掲したいと思っています。

5.

この「続き」は、それぞれのシンポジスト（フロア参加者）のこころの中で、動き続けているようです。

山愛美さんは、22 回大会のワークショップで、「続き」の進化版を行うそうですし、イメージにおいては我が国のトップランナー名取琢自さんは、フロアでしたが、同様に 22 回大会ワークショップで、21 回大会での不足部分の「続き」を目論まれています。また山崎史恵 22 回大会実行委員長の差配で、山中康裕先生が新潟でワークショップを行われます。そこでは、どのような進化バージョンを見せてくださるのでしょうか。岸本先生然りです。私の大きなミステイクによって 2 年も遅れましたが、どうかお許しください。今回、新しく当学会の基本的なキーワードである心身について、新しい世界の広がりを見せてくだされば、こんなにうれしいことはありません。演者はいずれも我が国のトップランナー、とても楽しみな 22 回大会が、新潟でもうすぐです。

戻りますが、20 回の大会企画のシンポジウムで司会の労を取ってくださいました石根左恵さん、今を時めくベースボールマガジン社の名編集長で常葉大学で教鞭をとったこともある才媛、鹿屋の卒業生でもある女史がイメージをともに担ってくださいましたこと、ありがたく安心してお任せできました。

音楽座ミュージカルの新オーナー相川タローさん、さすがの見事なプレゼンテーションでした。今回の企画のために、お忙しい中、凄くエネルギーをかけて準備してくださいましたことはすぐにわかりました。感謝の言葉もありません。相川さんのプレゼンテーションによる広がり、フロアの反応でもよく示されていました。もう少し時間があればよかったですね。もったいなかったです。

新井英和さんは鹿児島からよく来てくださいました。心臓内科医の先生はご自身のことを（臨床心理は）専門外とよく言われますが、そうではないことをプレゼンテーションを通じて印象強くわれわれに示してくださいました。先生が広げられたイメージの世界は、われわれは良く理解し共有できました。心身の新しい世界を見せてくださったように思います。

よく考えてみると、山さんが示された心理臨床の世界での根本的な共通認識であるイメージのことで、新井先生の示された新しい世界とを繋ぐのが、相川タローさんの存在だったように思います。それは意図されてか、山中先生が広げようとされた世界と繋がります。音と映像の世界の中で心身のことを考えること、これが、これからのわれわれに課された新しい課題であると思えるシンポジウムでした。

6.

最後になりましたが、フロアの皆様、ご参加くださいました多くの学会員の皆様、皆様のおかげで私の目論んだ壮大な物語が、なんとか終結を迎えられたように思います。心が動くことが「こころの治療＝成熟」である、というのがもっばらの私の論「信念」ですが、心の動く学会大会が浜松で開催できていたとしたら、これにまさる幸せはありません。

そうして、心を動かし続けること（緊張感や理不尽さも含めて）を、現代的な世情に逆らっても、せめて本学会においては否定されないことが、できる限り長く続くことを祈りつつ、老兵は去るのみ、です。

こうして、本学会は未来へ向けて進んでゆくのですね。皆さま、どうか、当学会の今後にご期待ください。（文中、敬称「さん」で失礼します）

令和元年 6 月 浜松にて
中島登代子

事例研究発表を行って

松井幸太（関西国際大学）

2016年、筑波大学で開催されました本学会第19回大会に参加致しました。そこで私は第一日目の事例研究発表にて「パニック障害と診断された20代女性の事例」を発表する機会を頂きました。学会での発表は、私がまだ大学院在学中であった2009年に、九州共立大学で開催された際、一般研究発表にて事例を発表して以来の7年ぶりでした。前回の発表では、1時間半があつという間に過ぎ、初めて大学院以外で発表できたことで、どこか満足してしまっていたことが印象に残っています。また、発表後に、ある先生から事例へのご意見をいただき、それに対して「私、なにかと恰好つけてしまうんですよ」と答え、これが次の私の課題の一つだなと思いながら帰路についたことを鮮明に記憶しています。

さて、今回の発表は、臨床心理士となって5年が経過し、初めての資格更新を終え、ひとつの節目に何か成長のきっかけとなるようなことをしたいと考え挑戦致しました。その貴重な経験を経て反省したことのひとつは、あれほどカウンセラーとクライアントとの関係性が重要だと学んできたにも関わらず、発表の記録からはそれがわかりにくかったことでした。私の中にどこか「事例検討なのだから、クライアントさんの語られたことが大事」ということをことさら優先してきたのかもしれない。しかしそうではなく、カウンセラーがどのような関わりをして、クライアントが変化したのか、そのことを検討できる場にしなければならなかったのだということをごくここに置いてきてしまっていました。とはいうものの、その場でフロアの先生方が納得いくよう、私がきちんと適切な言葉にして説明すればよいのですが、頭の中に漠然とした考えはあっても、それを言葉にして答えることができませんでした。ということは、結局は記述の問題というわけではなく、まだまだその力がないだけである、何となくカウンセラーとしてやれているという気持ちになっていた驕りを今回は痛いほど思い知らされました。そのような拙い発表中、意気消沈しかけそうになっている私に、温かいコメントをくださったりサポートしてくださった、座長の高橋幸治先生、指定討論者の名取琢自先生と廣瀬幸市先生、そしてフロアの先生方には心から感謝いたします。次回は少しでも成長した発表をお聴かせできるようにしたいと思います。

その後、私の事例発表を聴いてくださった方で、若い頃の私を知る何人かの方から「もっと大畑さんらしさを出したらいいのに」と声をかけていただけることが度々あり、『私らしさとはなんぞや?』ということを考えるのですが、果たして以前の私からは何を失ってきたのか、何が違うのか、自分らしさとは…? いったいそのことに気づく日が来るものなののでしょうか。どうやらこれが今後の私の大きな課題となるようです。

一般研究発表の体験

齊藤 茂（松本大学）

私は現在、大学でサッカーの指導に携わっている。指導者になり十数年が経った今でも、全国大会の前などは何日も前から緊張するし、試合当日も楽しみな気持ちがある一方で、不安でたまらなくなることが多い。これと同様に（さらには発表をお受けしたこと自体への後悔の念も強かったが）、常葉大学浜松キャンパスで開催された第20回記念大会の一般研究発表の日を迎えた。

そもそも、本学会での発表など、恐れ多くて到底する気はなかった。しかし、中島理事長先生からご連絡をいただき、先生が協力してくださるとおっしゃっていただいたこと、今大会が常葉大学で開催される第20回の記念大会であったこと、大学院時代の仲間の多くが大会実行委員を務めており、その前で発表できること等々。こうした数々のご縁を鑑みれば、発表せざるを得ないのではないかと思っただことから、渋々今回の研究発表をお受けした（中島先生からの電話をいただいた時点で、断るという選択肢がなかったようにも思うが…）。

さて、前置きが長くなってしまったが、当日は「教育現場における教師のストレスに関する面接調査－保護者と教師の関係性に焦点を当てて－」というタイトルで、教師を対象とした面接調査について発表した。研究発表をすることになっていたにも関わらず、事前に十分な考察もできておらず、ただ面接事例という材料を提供しただけの発表になってしまった。しかし、座長の前田章先生が作りだしてくださったフロアの雰囲気はとても温かく、また参加者の先生方は教育現場の臨床に関わる同志として自らの問題として考えていただいたことにより、発表者にとって非常に有意義な時間となった。特に、指定討論者の仁里文美先生には、教師、子ども、そして保護者という三者の関係性をどのように捉えていくかという、今後本研究を深めていくにあたり重要になるであろう、考察のための視点をいただいた。

当初は“材料”のままであった面接事例が、今回の研究発表により味付けをしていただき、今後、研究論文としてまとめてみたいと思うまでにしていただいた。上述したように、事前には不安で、後悔の念まであった一般研究発表であったが、私には楽しく、本当に有意義な時間となった。この場をお借りして、座長の前田先生、指定討論者の仁里先生、フロアにおられた先生方、さらには、大会実行委員会のスタッフの方々に感謝を申し上げたい。ありがとうございました！！

編集後記

SPACE の 35 号をお届けします。発行が 1 年遅れ皆様には大変ご迷惑をおかけしましたことをお詫び申し上げます。

さて、最近、全国各地で地震が相次いでいます。南海トラフ巨大地震が近いのでしょうか。大地が揺れるということは、私たちの身体、心、存在そのものがゆれるということです。社会や人間そのものが不穏な空気に包まれつつあるなか、本学会のやるべきことは沢山あるようです。

(前林)

SPACE No. 35
日本臨床心理身体運動学会 会報第 35 号
2019 年 6 月 25 日発行
日本臨床心理身体運動学会
会 長 山中康裕
編集責任 前林清和
事務局 〒600-8449
京都市下京区新町通松原下ル富永町 107-1
GROVING BASE 41
TEL : 075-585-5277
FAX : 075-320-3664
E-mail : office@rinsinsin.jp